



Contents

- 新年のご挨拶
- 2025年の活動報告
- LEARN (ほどく) MAKE (つくる) SHARE (つなげる) —ファブラボ鎌倉の活動/磯部 ゆき江
- 未来の図書館研究所主催イベントの開催報告



新年のご挨拶



今年(二〇二六年)は、WBC (World Baseball Classic) の年である。三年前の前回大会時に大谷翔平を始めとした日本選手の活躍にテレビにくぎ付けになった人も多いのではないかと。ところが、報道によれば、今年は WBC の地上波でのテレビ中継は行われな

近年、サッカー日本代表戦など人気の高いスポーツの注目試合が地上波で中継されず、ネットによる有料放送となるケースが相次いでいる。ボクシング井上尚弥の世界タイトルマッチは、もう何年もテレビでは放映されていない。国民的人気が高いスポーツも、今やおかれた社会経済的な環境によっては共有できないものになってきているようだ。

社会の分断は政治的・思想的な対立として語られがちだが、文化的・日常的なレベルでの体験・経験の違いも分断を生む背景の一つである。「ハーバード白熱教室」で著名なマイケル・サンデルは、貧富の格差を圧縮するための累進課税に関するトマ・ピケティとの議論の中で「累進課税の議論は、倫理的にも政治的にも、確固たるコミュニティの感覚を醸成できるかどうかにかかっている」と述べている。より平等な社会を築くプロジェクトのためには「金持ちと貧しい人たちが日常生活のなかで行き会う機会」や「何気なく混ざり合うことで、共通性を感じられる」「公共の場所や共用の空間を作り出す必要」がある、という主張だ※。たかがスポーツであっても、共通の視聴体験、そしてそれをめぐる雑談なども、実りある議論の基盤を形成する要素の一つとなりうるのだらう。

公共図書館は、情報を共有するための機関であり、同時に地域の全ての人々の文化機関である。社会経済的な状況に関わらず、地域の人々が様々な文化的体験を共有できる図書館は、お互いを理解し思いやることができるコミュニティ感覚の醸成に貢献できるはずだ。社会の分断が懸念されるこの時代に、図書館はさらに何ができるか、よく考えていきたい。

本年も引き続きよろしくお願いいたします。

二〇二六年一月

未来の図書館研究所

所長 戸田 あきら

※ マイケル・サンデル、トマ・ピケティ共著『平等について、いま話したいこと』岡本麻左子訳、早川書房、二〇二五年、一〇三—一〇六ページ

2025年の活動報告

- 1 月 Library Compass 第13回「われわれはどこにいるのか — 公共図書館のデジタルサービス —」公開
- 4 月 2024年度に策定支援業務を受託した「妙高市複合施設まちなか+(ぷらす)活用アクションプラン」が公表される
「江東区立図書館ビジョン策定支援業務委託」を受託
- 5 月 Library Compass 第14回「美麗島(台湾)の公共図書館」公開
- 6 月 書籍『図書館と居場所(未来の図書館研究所 調査・研究レポート第8号)』を発行
- 7 月 令和7年度関東地区公共図書館協議会研究発表大会に所長の戸田が登壇
ワークショップ「図書館員の未来準備」2025 第1期「図書館と地域社会」(3科目)を開催
- 9 月 Library Compass 第15回「シンガポールの公共図書館を訪ねて — デジタル技術活用に注目して」公開
- 11 月 第10回シンポジウム「図書館とWeb サイト — ユーザーエクスペリエンスを高める」を開催

PICK UP

11月21日(金)に出版クラブホールで開催した第10回シンポジウム「図書館とWeb サイト」は、約180名のご参加をえて、池内淳氏(筑波大学図書館情報メディア系准教授)、川嶋斉氏(野田市立興風図書館/Code4Lib JAPAN)のご講演とディスカッションを行いました。詳細は4ページ目をご覧ください。

▶ アーカイブ配信実施中(2026年1月31日まで) <https://youtu.be/mdcBAb-Zygs>



- 11 月 『図書館雑誌』(2025年11月号)「図書館員の本棚」で書籍『図書館と居場所』が紹介される
『Journal of I-LISS Japan』Vol.8 No.1 (2025年11月号)に理事長の永田が「図書館員のコンピテンスを高める:ワークショップ「図書館員の未来準備」と『図書館員の未来カリキュラム(青弓社)』」を寄稿
『Journal of I-LISS Japan』(2025年11月号)に書籍『図書館と居場所』の書評掲載
- 12 月 ワorkshop「図書館員の未来準備」2025 第2期「図書館のデジタルサービス」(3科目)を開催

LEARN (ほどく) MAKE (つくる) SHARE (つなげる) —ファブラボ鎌倉の活動

磯部 ゆき江

◆はじめに

変化が早く予測困難な現代には、答えのない問題に解決策を見つめ出し、ときには協働してこれまでとは違う新しい価値を創造する、「21世紀型スキル」が必要とされる。欧米の公共図書館では近年メーカースペース（ハイテク機器から昔ながらの道具までそろえ、人々がそれを使い合って、学習・創造・共有できるコミュニティスペース）が多く設置され、図書館が時代の要請に応じて人々の創造性を高めイノベーションを支援する役割を果たそうとしているようだ。一方、日本では、図書館のメーカースペースは数えるほどである。彼我のこの違いの要因は何なのだろうか。その背景を考えるために、ファブラボ鎌倉（一般社団法人国際STEM学習協会）を訪ね、代表理事の渡辺ゆうかさんにお話をうかがった。

◆ファブラボ鎌倉

ファブラボは、マサチューセッツ工科大学のニール・ガーシェンフェルド (Neil Gershenfeld) 教授の提唱による、デジタルからアナログまでの多様な工作機械を備えた実験的な市民工房の、世界100か国1200以上に広がる国際的なネットワークである。

ファブラボ鎌倉は、2011年5月、渡辺さんと田中浩也教授（慶應義塾大学）により東アジア初のファブラボとして活動を開始した。渡辺さんは、前年2010年に『世界を変えるデザイン展』での田中氏の講演で初めてファブラボの活動を知り、すぐに田中氏に連絡をとったという。自身の経験やバックグラウンド（美大出身でデザインをやっていることや海外経験）が活かせ、タイミングよく場所を立ち上げられ、しっくり活動に入ってしまったと話す。

ファブラボ鎌倉は鎌倉駅から徒歩5分の閑静な場所に秋田県の元酒蔵を移築して再構築された建物（「結の蔵」と呼ばれている）に2室を借り受け活動している。外観も歴史を感じさせて魅力的だが、建物の内部も時間が静かに流れ、設えに日本文化が感じられる。鎌倉市を選んだのは、交通が便利で、地域の文化や歴史とテクノロジーがどう融合していくかという面白さがあったからだという。



▲ファブラボ鎌倉 建物の外観

◆ファブラボの理念と世界観

ファブラボ鎌倉では、「LEARN (ほどく) MAKE (つくる) SHARE (つなげる)」の理念を掲げている。LEARN, SHARE に日本語の「ほどく」、「つなげる」をあてているのはどういう意味を込めているのだろうか。

まず、LEARN (ほどく) は、知識としてすでに有しているものが完璧ではないから、自分のわからなさを自分なりにほどこいていく作業として学びがあり、固定概念を脇に置いて、自分なりに世界を解釈するという意味合いがあるという。MAKE (つくる) は、こうやればうまくできるはずだったのに何か違った、自分と理想のギャップを感じて自己を認識していく側面もある。SHARE (つなげる) は、ファブラボでは経験や体験を失敗も含め記録してシェアする。実際に機械を使い何かをつくることを目的にみんながわいわい試行錯誤しながらノウハウを共有することである。

「ファブアカデミー」が、ファブラボの根幹のプログラムである。毎週水曜日夜のガーシェンフェルド教授によるオンラインのグローバル講義が行われ、課題の製作はノード登録されたファブラボにおいて対面で行う。受講者にはインストラクターがついて指導してくれるが、自分の力で、学んだ技術を総合的に組みあわせ、世の中になかったプロトタイプ的设计・製作に挑み、最終プレゼンテーションまでを行う。また、そのプロセスをしっかりとドキュメンテーションすることもカリキュラムの重要な要件である。日本にいくつもファブラボがあるが、この世界的なプログラムを実施しているノードは少ないため、これを実施しているファブラボ鎌倉まで通ってくるという。各国のファブラボからあわせて毎年200名程度が参加して約半年にわたってタイトなカリキュラムをこなしていくものだ。参加費5000ドルは安価ではないし、働きながらタイトでハードな課題に取り組むだけの時間を確保するのも大変だ。しかし、世界中の人たちと学び、世界とつながり、新しい価値観を創り出していく体験こそがファブラボそのものだという。

このファブアカデミーの修了率は60%、ファブラボ運営者、大学教員・研究者、社会人、学生ら、アカデミーで技術を身につけた人たちが、ファブラボの質的なレベルを担う人材になっている。

◆地域に開く活動 —オープンラボとファブコネクト

ファブラボ鎌倉が展開する活動には、週1回月曜日の朝に行っている「オープンラボ(朝ファブ)」という10年以上継続しているプログラムがある。参加ルールは朝30分掃除を手伝うこと。お金を払うとサービスを受けるという意識になってしまいがちだが、ファブラボはサービスを提供するわけではないという。オープンラボでは、自分のことは自分でできて、パソコン操作ができる人、そして、わからないときは自分で調べ、自分でつくるというマインドを大事にしている。年齢層は小学生から70代と幅広い。主婦やリタイアした人が多いが、卓越したスキルをもつ人もいる。ファブラボとの関わり方は、二つフェーズがある。最初は、使い手、ユーザーとして来るというもの、次にだんだん常連になるとサポートする側になっていく。自分の存在価値、自分が役立っているという感覚を大事にしている。

朝ファブに不登校の小学生がやってきて、受け入れていくうち人数が多くなってきた。ファブラボの役割をあらためて考え、ただ単にものづくりする場所ではなく、鎌倉市内の不登校の子どもたちを対象に、地域の中で多様な価値を見つけられる、週1回のフリースクールとしての取組み「ファブコネクト」を始めた（市外の子どもは朝ファブで受け入れる）。クラウドファンディングを活用して、サポーターになってくれる方々に協力を求め、子どもたちを見守る体制を確保して、木曜の午前に実施している。該当する子どもの校長先生と担任の先生が承認すればファブラボの活動は出席の扱いになる。

子どもたちは、教室で学ぶということが合わないだけで、ファブラボにいたときは落ち着いてものづくりをしている。不登校は小学校から中学校になると急に増えるので、なるべく小学校の低学年のうちに自分の得意なこと、地域とつながり、いろいろな知り合いをつくっておくことを地域で担う。孤立せずに一人でも話が通じる家族とは違う人と出会うだけで救われる子どもも多い。ものづくりの何かできたという感覚がその子の自信につながる。

◆中高生のためのプロジェクト ―ファブクエストとファブリカ！

ファブラボ鎌倉は、中高生を対象として二つのプログラムを行っている。一つは課題解決の意欲とパワーにあふれる中高生たちを対象にした「ファブクエスト」、もう一つは対照的に興味・関心をもてない内発的動機づけが希薄な中高生をターゲットとする「ファブリカ！」である。それぞれ三菱みらい育成財団の助成を獲得して実施している。

「ファブクエスト(地域課題をものづくりで解決)」は、鎌倉の社会的課題をモノづくりで解決するという設定で、「ファブシティ特別研究員」に任命された中高生たちが、さまざまな機会をいかし、スキルを身につけていくプロジェクトである。半年間、40名の中高生が8~9チームになってアイデアを出し合い、試行錯誤しながら作品をつくっていく。最後は鎌倉市長の前でプレゼンを行い、修了証を受け取る。ゼロからスタートし、モノをつくって実装するまでの体験を手助けするのは大学生・社会人サポーターだ。3年間でプロジェクトに参加したファブシティ特別研究員は、約100名にのぼる。いずれも意欲的で元気な学生たちで、即戦力の人材となる。最初の年に参加した学生のうち何人かは大学生となってサポートする側に回っている。近い年代どうしの言いやすい関係ができ、つながっていく良い循環ができていく。また、すべての活動はファブアカデミーと同様、ドキュメンテーションされる。プロジェクトの成果は実績として蓄積され共有されている。

一方、「ファブリカ！(中高生の居場所×次世代ファッションテック)」は、同じ中高生限定でも、興味・関心などのモチベーションが高くない生徒たちにアプローチしていくプロジェクトだ。2025年度から鎌倉市青少年課、鎌倉女子大学と連携して実施している。鎌倉市内の約3000人の中高生にアンケートを取ったところ、自分の興味関心がわからない、あるいは持てない、何が自分の強みかわからない子どもたちが多かった。青少年会館の調理室の一角に月2回ラボが現れる。地域の子どものために、3Dプリンターやミシン、材料を持ち込んで「モノづくり」チャレンジを呼びかけている。そもそも募集しても申し込まないような子たちを対象にしているので、この場所に来てもらうことが大変だという。連携している青少年課の職員がロビーにいつもいて、「ファブリカやってみない？」と声をかけてくれる。すぐに持ち帰ることのできる可愛いものからつくる。1回来れば、楽しいし、つくるのが好きな子は、また来るようになっていくが、応用して何かつくる気持ちになるかどうかは様子をみて急がないようにしている。思春期の子どもの気持ちに寄り添って、距離感を大事にしているという。

◆地域社会に実装される新しいものづくり

ファブラボ鎌倉がこの地で活動して2026年には15年を迎える。その存在が地域に広く知られるようになり、着実に新しいものづくりが地域社会で取り入れられるようになってきた。毎年、ファブラボ鎌倉主催、鎌倉市共催で開催しているファブシティカマクラ展で、2024年にファブシティ研究員を募って開発が始まった新しいタイプの生ごみ処理器は、商品化される予定だ。鎌倉市は他市にごみ処理を依頼しているのでその費用が年間30億円以上もかかり、ごみの4割を占めるのが生ごみだそうである。また、鎌倉市職員が使用する徽章の作成提案が市役所商工課からファブラボに持ち込まれた。この徽章は、ファブラボ鎌倉が徽章の丸型木地部分を、伝統鎌倉彫事業協同組合の職人が一つひとつ手作業で彫刻と漆塗りを施すという工程で制作される。デジタル×伝統で効率化が実現した。

鎌倉市立図書館との連携プロジェクトも始まっている。ファブラボ鎌倉が市内の図書館に出かけていき、ファブを体験できるワークショップを開催するもので、2025年は腰越図書館で夏休みの7月に、2日間のワークショップと2週間の展示を行った。

◆おわりに

このように新しい価値づくりをグローバルとローカルの視野で実現している渡辺さんは、最後に図書館のメーカースペースについて、次のような指摘をした。

- ・その地域のニーズや課題と結びつけた方向性にしたいほうが長続きする。地域には、自分の知識を役立たせたい、自分のスキルを次世代に渡していきたい、という思いの方がいるので、そういう方々にサポートしてもらうようにする。
- ・機械だけでなく、人が育つ場所、交流を促す場所に、コンテンツとプログラムコーディネーターがいなくてはいけません。大学などと連携して大学生サポーターがくるなどの流れができるとよい。

ファブラボが参考になっているのは「つながりの学習(Connected Learning)」という考え方である。個人の興味や情熱が原動力となり、仲間に支えられ、学業と結びつく活動となるような学習を指す。新しい知識を一人で見つけられる場合と、仲間がいるから興味関心の広がることもある。また、日常生活のなかでやりたいことがある人もいればアカデミックな領域でチャレンジしたい人もいる。

これからさまざまな職業がAIに置き換えられていく。企画やプレゼンとは別のスキルが必要で、プロジェクトマネジメント的に現場を動かす力、要請されるものをカタチにし社会に実装させる能力のない人は生き残れない。渡辺さんはその実装力のもととなるのは興味関心ではないかと言う。

日本の公共図書館でも近年、「場としての図書館」という交流の文脈で、例えば多くのイベントが行われるようになったが、人々の興味関心を喚起して、明日の自分のため、仲間のために知識をシェアしていくことがどれほどできているのだろうか。欧米図書館のメーカースペースの活動は、生活に必要なものをつくったり、さらには世の中にないものや要請されることに関心を向けたりする活動を通じて、社会への実装力につなげようとしている。それは社会を発展させていく図書館の力となるものだ。日本の図書館でも新しい価値の共創をうたって図書館計画を策定しているところはたくさんあるのに、デジタル化が遅れメーカースペースの設置が進まないのは、この視点の欠如がその要因かもしれない。「21世紀型スキル」を必要とする時代に図書館は、こうした視点がなければ、生き残るのが難しくなるだろう。

謝辞

インタビューに快く応じてくださった渡辺ゆうか氏に深く感謝申し上げます。

【参考文献】

- ・一般社団法人国際STEM学習協会「FabLab Kamakura」<https://www.fablabkamakura.com/>(参照 2025-12-20)
- ・鎌倉市「Fab Cityの推進～誰もがテクノロジーで「課題解決」を身近に感じるまちへ～」<https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/seisaku-souzou/fabcity.html>(参照 2025-12-20)
- ・渡辺ゆうか「FAB が地域をつなぐ ファブラボ鎌倉の取り組みから」『FAB に何が可能か「つくりながら生きる」21世紀の野生の思考』フィルムアート社、2013、p.17-61.
- ・渡辺ゆうか「図書館におけるファブラボ(メーカースペース)の可能性」『図書館とポスト真実』未来の図書館研究所、樹村房(発売)、2022、p.83-113.
- ・渡辺ゆうか「図書館×メーカースペース これまでとこれからに向けて」『図書館員の未来カリキュラム』青弓社、2023、p.146-171.



ワークショップ 図書館員の未来準備 2025

第2期「図書館のデジタルサービス」は、3日間3科目で開催し、会場とオンラインあわせて延べ32名の方にご参加いただきました。

各科目の詳細については、当研究所Facebookページで紹介しています。右記QRコードからご覧いただけます。



ここでは各科目の受講者からの声をご紹介します。

◆科目1「AI時代の知の継承と図書館の未来」

日時: 2025年12月2日(火) 14:00~16:00

講師: 安藤幸央氏(株式会社エクサ/立教大学兼任講師)

実際にAIとのやりとりを見せていただきながらお話しいただいたので、ものすごくわかりやすかったです。具体的な活用方法や可能性を知ることができ、さらに参加者のリアルな活用方法も知ることができ、良い意味で衝撃を受けつつ大変勉強になりました。

◆科目2「図書館で活用可能なAIを探る」

日時: 2025年12月8日(月) 14:00~16:00

講師: 中野良一氏(かんたん AI 教育ラボ)

AIをどう活用できるか、を考えるためには、AI という相手について知る必要がある、という当たり前の視点が抜けていたことに気づかされました。実際に各種ツールを使ってみることで、AIは数字でものを認識していくこと、人格やまとめ方の指示を具体的にすればそれに応えてくれることなど、AIの特性を体感できました。

◆科目3「資料のデジタルデータとWebサービス」

日時: 2025年12月15日(月) 13:00~17:00

講師: 川嶋斉氏(野田市立興風図書館/Code4Lib JAPAN)

実践的な内容で、知識を学ぶところから試行錯誤して成果物を出すところまでオンラインで完結でき、とても達成感のあるワークショップでした。

公共図書館という環境の制約の下でも可能な取り組みが創出できることを体感できた。



第10回シンポジウム 図書館とWeb サイト —ユーザーエクスペリエンスを高める—

◆日時: 2025年11月21日(金) 14:00~16:30

◆会場: 出版クラブホール

◆参加者数: 会場 約50名・オンライン(Zoom) 約130名

◆プログラム:

14:00~ シンポジウムの開会ご挨拶と趣旨

14:20 戸田あきら(未来の図書館研究所所長)

講演「オンライン環境における図書館利用とWeb サイト」

15:05 池内淳氏(筑波大学図書館情報メディア系准教授)

講演「野田市立図書館の事例」

15:35 川嶋斉氏(野田市立興風図書館/Code4Lib JAPAN)

15:50~ ディスカッション

16:30



◆参加者の声

図書館のウェブサイトとその機能について体系的に考えられる内容でとてもよい内容でした。どれもとても触発されるお話でした。

多角的な視点から図書館とWebサービスについてのご意見を伺い関心を深められたことがよかった。

館種を超えた参加者による多角的な質問がよかったと思います。普段は公共図書館の参加が多い研修や講演に参加することが多いのですが、もっと視野を広くして図書館サービスを考えていく上では、こういったシンポジウムに積極的に参加していきたいと思いました。

現在の図書館事情を事例も混じえて知ることができた。説得力のあるデータの解析がとても分かりやすかったです。

未来の図書館研究所調査・研究レポートシリーズ 電子書籍版配信中!



最新刊

『図書館と
居場所』
2026年1月
配信開始!



※ 画像はイメージです。
一部カラー化対象外の図・画像もあります。

Point

本シリーズ電子書籍版では、本文中の図・写真をカラーでご覧いただけます!

Point

図書館向け価格も紙の書籍と同じ価格で提供中! (最新刊を除く)

